

こぼれおちる

森戸晶子

一月十八日 国内PCR検査陽性者数累計一名 死亡者数〇名

——マスク、買っておいたほうがいいのかな。

ドラッグストアの店頭に積まれた箱入りマスクが目に入って、ふいに胸がざわついた。普段、マスクは使わない。花粉症でもないし、インフルエンザも風邪にも滅多に罹らない。家にマスクのストックなんて、数枚あればいいほう。だけど、今朝のニュースで武漢での騒ぎが取り上げられていた。日本でもコロナウイルスが蔓延したら——そのときのために、既にマスクを買い溜めするひともいるという。

でも、何も日本で流行するとは限らないし……。

箱に伸びかけた手が止まったのは、SARS、MARSのことが頭によぎったからだ。SARSウイルスが中国、韓国で猛威をふるったときは、きっと日本でも流行すると思っ
てすごく怖かった。だが、実際はたいしたことはなかった。あるときだってできたんだ、
今回も水際で防げるはず——そう思い、騒いでいた胸を宥める。

……大丈夫。たぶん、大丈夫だよね。

私はそう胸でつぶやき、更にもその声を体中にこだまするように繰り返す。以前は大丈夫
だった、だから今回も。もっとも私は水際対策がどのように行われるかなど、ニュースで
数秒見聞きする程度でほとんど知らなかったのだが。

「濡^み？」

どうした、と隣を歩いていた市也も足を止める。

「ううん……マスクをたくさん売っていたから、ちょっと気になっただけ」

「あー……何だっけ、コロナウイルス？」

「ばっかだなあ、と市也は大きな口を広げて笑う。そのとき、パーマを当てたばかりのゆるく癖づいた彼の髪まで軽やかに揺れた。

「濡は心配しすぎだよ。コロナウイルスなんて、どうせインフルエンザのちよつときついやつだろ？ そんなの、気にしなくてもいいって！」

「そ……そう、かな」

私は声をこぼしつつも、市也の大きな物言いに深い安堵を感じた。

土曜のショッピングモールは人でごった返していた。通路を歩いていても、他の買い物客と肩が当たりそうになる。吹き抜けのイベントホールでは着ぐるみのショーが行われ、狭い観覧席は多くの親子連れで埋めつくされている。それを気のない様子で眺めつつ、エスカレーターに足を踏み出したとき市也が言った。

「腹が減ったな。昼、どうする？」

そうだね、とうなずきながら、私はレストラン街にどんな店があったか思い浮かべる。

市也は和食があまり好きではない。だったら中華、いや駄目だ。人気のある店だから、今の時間帯だときつと行列ができています。せっかく目当てのゲーム機を安く買えて今日の市也は機嫌がいいのに、それを損ねたくなかった。じゃあ、イタリアン……そのとき、ペネアラビータが食べたいな、と思った。久しぶりにぴりっと辛いものを口にしたい。だが、市也ならもつと脂っこい、ボリュームのある料理のほうがいい。イタリアンだと、食後に

いつも少し物足りなさそうな顔をするから。

「じゃあ、三階にある……グリルレストランはどう？ ホイルに包まれたハンバーグがおいしいって聞いたよ」

私がそう言うと、

「いいね」

と、市也は嬉しそうにはにかんだ。笑ったとき、チャコールグレーのプラスチックフレーム眼鏡の奥で明るい茶色の目が細まり、しゃっと目尻に薄い皺が寄る。それを見るのが――大学生のころから、堪らなく好きだった。そしてそれは二十六歳になった今も。

「昼飯食べたら、ペットショップに寄ろうか。溘、犬見るの好きだろ」

そう言われて、私は大きくうなずいた。

「ほんと？ 嬉しい」

「さつき店の前を通りかかったとき、もじゃもじゃ……ぬいぐるみみたいなもじゃもじゃ犬がいた。ほら、溘がよく見る動画に出てくる……」

「トイプードル」

もじゃもじゃ、と子供みたいに擬態語を繰り返す市也に私はそう言いつつ笑みを漏らした。

一月二十日 国内PCR検査陽性者数累計〇名 死亡者数〇名

「……うん、うん。そっか、リビーももう五歳か。大きくなったね。え？ ちょっと生意

気なことを言うようになった？ あはは、いいじゃん。リビーは賢い子だし」

耳に当てたスマートフォンのスピーカーから、明日香の声がこぼれる。その背中では、明日香の夫であるジョンが娘のリビーを遊ばせているのだろう、きゃっきゃと子供の笑声がしきりに混じる。奔放な笑い声は、木の葉の合間をつついてきらきらとこぼれ落ちる陽光みたい私に私の耳に触れる。

時計に目をやると午前二時を過ぎていた。明日香のほう——ロンドンはまだ夕方だ。私は幼馴染みの声に耳を澄ませながら、壁に掛けたコルクボードを指で突いた。ボードには、明日香の案内で二年前に旅したイギリスの写真が貼られている。

セルリアンブルーの海原に、真っ白なチョーク質の崖が屹立したドーバー。

まるで万華鏡の中にもいるみたいだった、聖ジョージ礼拝堂のステンドグラス。

テムズ川の畔にある観覧車、コカ・コーラ・ロンドン・アイに乗って歯を覗かせて笑う明日香と私。

緑が眩しいラッセル・スクウェアで、芝生にシートを広げてランチにかぶりつくジョンとリビー。

「——こんな時間に電話していても大丈夫？ 日本はもう夜遅い時間でしょ。濡、明日仕事は？」

上機嫌に喋っていた明日香が我に返ったように私に尋ねた。

「大丈夫だよ。私……今、学習塾の事務スタッフをやっているの。出勤時間が遅くて基本夜型生活だから、イギリスの時差に合わせるの昔より得意」

「あのブラックな会社、辞めたんだね。……うん、そのほうがいいよ。今の濡、前よりずっと元気そうだし」

「……そう？ うん……まあ気楽には、なったね」

私は曖昧に微笑む。時給の良さと通勤のしやすさで選んだ今の仕事だが、以前よりはずつと働きやすい。人間関係も悪くなく、日々やるべきことだけを淡々とこなせる。勤務時間が遅いからどうしても夜型の生活になるのは避けられないが、どちらかといえは夜のほうが強いから苦にはならなかった。

話題を別のものに変えたいな——と思っていると、突然火がついたように大きな泣き声
がスピーカーから飛び散った。

「えっ……ごめん、ちょっと待って。どうしたの、リビー……ああ……」

にわかに慌てる明日香の声。スマートフォンが明日香の手から離れ、テーブルに置かれる硬い音が響く。しばらくのあいだ、声を張りあげて泣くリビーとそれをひたすら宥める夫婦の言葉が電話口から飛びかった。数分後、再び明日香がスマートフォンを手にして「ごめんね、濡」と囁いた。

「リビー、大丈夫なの？」

激しい泣き方だったから、心配になって訊くと、

「うん、おもちゃを壊しちゃったみたいで。一応、泣きやんだ」

と、明日香は言った。

「おもちゃって？ 随分気に入ってたんだね」

私が何とはなしに尋ねると、途端に明日香は口ごもり、歯切れ悪く「それが……ね」と細い声を漏らした。

「ごめん。濡にもらったものなの。……ほら、こっちに来たときにお土産に持ってきてく

れたでしょ。日本のおもちゃ」

明日香はすまなそうに謝った。私は以前、リビーに日本製のままごとセットをプレゼントしたのを思い出しながら「なあんだ」と笑った。幼い子供にしたら愛用のおもちゃが破損するのは悲劇かもしれないが、今まで使い続けてくれていたと思うとくすぐったい気持ちで胸がいっぱいになった。

「その程度のことでも良かった。じゃあ、同じものをまたそっちに送るよ。まだ生産されていると思う」

二月八日 国内PCR検査陽性者数累計十六名 死亡者数〇名

「穂川^{ほがわ}先生。先生はコロナウイルスについて、どう思います？」

言葉遣いは折り目正しいが――その割に耳に触れた声音は高く、幼いかんじがする。

振り向くと、眼鏡をかけた女子が立っていた。仕事場で試験対策用のプリントを印刷していた私は、声をかけてきた小学五年生の小牧^{こまき}ゆいに微笑んだ。私は講師でなく――事務スタッフ、しかもただのパートだから先生と呼ばれる立場ではないが、この小牧ゆいは私のことを律儀に先生と呼ぶ。

「そうねえ……」

どう答えたものか。近頃のニュースが頭をかすめる。とうとう武漢が封鎖された。それに伴って、日本でも湖北省に滞在歴のある外国人の入国拒否を行うようになった。そういう制限はこれまでまったくなかったから、私は胸を撫でおろした。混み合った病室や人工呼吸器をつけた患者など、日々武漢から流れてくる映像を目にしているとやっぱり怖かった。

た。どうして日本は入国者に制限を設けないのだろうか、対応が遅すぎる、とここ数日は苛立っていた。

マスクも手に入りづらくなった。ドラッグストアのマスクコーナーは品切れか、運良く仕入れがあったとしても一人につき一日一パックまで。私も昨日ようやく五枚入りの使い捨てマスクを手に入れたが、普段通勤のときはマスクなしで行って、教室長が去年のうちに買いこんだマスクが仕事場にはあるのでそれを着けるようにしている。

こんなことになるのなら、一月のうちにあの箱入りマスクを買っておけばよかった。そう悔やまれてならない。

「でも、感染しても致死率は二パーセントなんでしょう。高齢者や基礎疾患のある人は別だけど、それ以外の人はそんなに怖がらなくちゃいけない数字じゃない」

本でも読み上げるように、すらすらと冷静な声をつむいだのはゆいだった。黒目がちの瞳が時折瞬きをしながらこちらを向いている。

随分詳しいな、と私は内心舌を巻いたが、そういえば中学受験をするゆいは毎日小学生新聞を読んでいるのだった。コロナウイルスのことも、記事で知ったのだろう。政治や世間で話題になっている事件など、新聞で読んだことを大人顔負けに話しては周囲の人々の反応を窺う、というのは彼女のお気に入りの遊びだった。

——二パーセント。

たかが二パーセント、でも二パーセントの人は確実に死ぬ。その数字を侮ってはいけな
いと思う。誰が、その二パーセントの範疇に入るかなんてわからない。

「小牧さんは何でも知っているのね。すごい」

ゆいの言葉には肯定も否定も示さず——そう言うと、彼女は唇の端を大きく引き上げて、ようやく子供らしい笑みを浮かべた。

「今日もお疲れさま。……マスク、ドラッグストアではなかなか売ってないね。足りてる？」

仕事からの帰り道、市也にそう電話をかけた。彼も自分みたいに困ってはいないだろうか、と思ったのだが、返ってきたのは暢気な声だった。

「マスク？ そんなもの、してないよ。だって苦しいじゃん」

えっ、と私は思わず声を上擦らせた。

「そんな……日本でも感染者が出てるんだよ？ マスクをしないと危ないよ。あと、手もアルコール消毒して……」

そう口にする、スピーカーの向こうで市也が小さく吹き出した。

「……まったく、濡は神経質だなー。コロナなんて怖くないよ」

「そ、そんなことないよ。武漢ではたくさん人が亡くなっているし……あ！ マスクがなかったら、私が作ろうか。私も市販のマスクは切らしちゃったから、今日ガーゼを買ってきたの。手作りマスクを縫おうと思って」

「えー。だから、マスクは息苦しいから嫌だって」

生地を工夫して苦しくならないように作るから、と言ってもだめだった。市也はだんだん不満そうに唸るようになって、

「手作りマスクなんて、男でしてる奴いないじゃん。子供とかならともかく……格好つか

ないからいいわ」

と、溜息をこぼした。

「……わかった。でも本当に……気をつけてよ」

私は肩を落として電話を切った。通話を終えるなり、またスマートフォンが着信音をたてた。だが相手は市也ではなく、明日香からのラインメッセージだった。

「コロナウイルス、そっちは大丈夫？ イギリスでも感染者が数人見つかったけど、アジアのほうは大変なことになっているじゃない」

心配してわざわざ訊いてくれたのか、と私は目を細めた。大丈夫だよ、と明日香に返信する。

「私たちの生活は特に変わらないよ。マスクが店で品切れになっているくらい」
すると、また明日香からの言葉がディスプレイに明るく灯った。

「マスクに困っているなら、いくらか送ろうか」

「いいの？ ありがとう。すごく助かる」

三月三日 国内PCR検査陽性者数累計二七八名 死亡者数六名

「……うそ、ここもない」

私は空の商品棚を見て、絶句した。トイレットペーパーとティッシュペーパー、そのふたつがドラッグストアからきれいに消えている。化粧品や洗剤はたくさんある。色とりどりのテスターやPOP、パッケージで目がちかちかしそうだ。それなのに、歯の一本が欠けてなくなったみたいに紙類だけが品切れになっていて、スチールラックの支柱とその後

ろにある薄汚れた壁が丸見えになっていた。

こんなこと初めてだ。私は思わず息を呑む。

少なくとも客が殺到したために店の棚が空になっているなんて幼いころも、成人してからも目にしたことがない。似たことといえば、オイルショックか。そう思ったとき、中学生のころに目にした——社会の教科書に載っていたモノクロの写真が頭によぎる。主婦たちが争うように店のトイレトペーパーに手を伸ばしている写真。使い捨て品に囲まれ、対価さえ払えば何の滞りもなく物が供給されるのが当たり前過ぎて、日本でこんなことが起きるんだな——と、あの写真を見たときは異国のお伽話のように遠く感じていたのに。

「どうしよう……」

舌打ちしたい気持ちに駆られながら、私は家にあるトイレトペーパーの数を思い出す。あと五ロール——少し心許ないが、様子を見るしかない。ドラッグストアよりも値段が高いコンビニはどうだろう、と考えてコンビニにも足を向けてみた。

やっぱり——ない。

コンビニのスチールラックも、ペーパー類のところだけすっからかんだ。値札が目に入ったが、普段なら絶対手を出す気にはならないだろうな、と思った。皆それでも買っていたのか。

踵を返すようにコンビニから出たとき、パステルカラーのポスターがガラス扉に貼られているのに気がついた。三月三日はひなまつり！ 期間限定特製スイーツ発売中——そんなふうにポップなフォントの文字が躍り、可愛らしいお雛さまのイラストが印刷されている。

そうだ今日は三日か、と思い出し——とんだ桃の節句だ、と溜息がこぼれた。

手ぶらのまま一人暮らしのアパートに帰ると、スマートフォンが鳴った。電話をかけてきたのは市也だった。

「漑。なあ、ティッシュペーパー……おまえんちに買い置きないか？」

スピーカーから市也の細い声がこぼれる。

「え？ ティッシュなら品薄になる前に買ってあったから、まだあるけど」

聞けば、市也はトイレトペーパーはあるが、たまたまティッシュペーパーを切らしてしまっただけらしい。

「頼む。だったら、分けてくれないか。少しでいいから」

「わかった、いいよ」

そう頷いた。

「ねえ、市也……マスクは……」

ちゃんとしてるの。そんな言葉が喉元までせりあがってきたが、また煙たがられるかな、と思いきや口を噤んだ。このところ、自分がマスクを着けるたび無頓着な市也がどうしているか心配でならない。

「ん、なんか言ったか。漑」

「ねえ、市也のまわりでは……体調を崩したり咳をしているひと、いないよね……？」

「大丈夫、だよな？」

マスクの話題を避けるから、どうしても迂遠な言い方になってしまう。

「いない、いない。大丈夫だって」

「手洗い、うがいもしてる？」

「あ？ あーうん、まあ……」

途端に歯切れの悪い、間延びした声が聞こえてくる。ああ、これはろくにやってないな。私の唇から深い溜息が漏れた。

夕飯に八宝菜を作ったが、食欲が湧かなかった。天井のLED電球が漂白したような光を投げかける中、冷めてすっかりとろみがなくなった汁と脂身の多い肉片を口に含む気になれなくて箸の先で小突きながら、ぼんやりとスマートフォンを触っていた。ツイッターアプリを開くと、紙類が品薄になっていることへの不満が飛び交っている。

「どこに行っても、トイレットペーパーがない！ 信じられない。うち、あと二ロールしかないのに！」

「デマだろ？ なのに、こんな風に踊らされてる俺たち。日本人って馬鹿なんじゃね？」

「わざわざ空の商品棚の写真なんか載せるなよ。みんな余計不安になって、買い占めるんだから」

「転売ヤー、マジけしからん」

「トイレ行くのを我慢しろってか。コロナウイルス、最悪」

「感染もじわじわ増えてきたよね。怖いな」

「本当に勘弁してほしい。コロナウイルスって、どうせ中国の陰謀だろ？ 自国に撒いてどうするんだよ」

「陰謀論乙。それもデマだぜ」

あらゆる人々が発する言葉——言葉、言葉。タイムラインを眺めていたら、自分の存在なんてあつという間に埋もれてしまいそうだ。皆の言葉は、善意からこぼれたものにして悪意にまみれたものにして、ミルフィーユのようにかさかさ何層にも折り重なって、私は薄いクリームよろしく押しつぶされる。

三月二十一日 国内PCR検査陽性者数累計一〇二五名 死亡者数三十六名

イギリスの様子が良くない。イギリス——いや、イタリアを含めたら欧州にコロナウイルスが伝播したのは日本よりずっと後なのに、一旦感染者が出始めると、坂を転げ落ちるように悪化し悲惨な状況に陥った。

土曜日の深夜、私は明日香を心配して電話をかけた。

「……うん、感染者は増えてるよ。私たちも、できるだけ気をつけて過ごしているけど——いくら感染しないようになって注意しても、限界があるよね。特にリビーは小さいから感染症は心配。コロナウイルスは高齢者のほうが危ういって聞いても……やっぱりね。あ、ちょっと待って。仕事からの帰りなの……今、家に着いたところだから」

明日香の抑えた声がスピーカーから聞こえた。鍵をがちゃがちゃ回している音と、背後から街路を通りすぎる自動車のエンジン音がこぼれる。

「……こっちはそのうち外出禁止になるかもしれない」

「イタリアみたいに？ そんなに深刻な状況なの？」

私は驚いて目を開いた。うん、まあ——と明日香が苦笑をこぼしたときだった。

突然、誰かの怒号が耳朶を打った。

早口の英語。何を言っているのかまではわからなかった。それに対して、明日香が声を抑えながら丁寧に言葉を紡ぐ。謝っているようだった。何か起こったのだろうか。剣呑な様子が伝わってきて、私は息を詰めた。

「ごめん、ちょっと……電話もう切るね」

明日香が素早くマイクに口を寄せ、言った。

「さっき、擦れ違いさまに近所の人に怒られちゃった。話し声がうるさいって。アジア人コロナを運んでくるな、だって。……はは、笑っちゃう」

明日香はそう力なく呻いた。私は一瞬言葉を失う——と同時に、ぶつりとスピーカーから硬い音が響いて通話が切れた。

三月三十日 国内PCR検査陽性者数累計一九二九名 死亡者数五十九名

仕事場のマスクもとうとう切れた。もともとはインフルエンザ予防のために秋口に発注したものだったが、さっき社員が一枚摘まんできて、それが最後だった。私は空になった箱をつぶしながら、自分のマスクを縫っておいてよかったと思った。慣れない針仕事だったが、手作りマスクの使い心地はまあまあだ。私が作ったときにはまだ手に入ったが、今ではガーゼも品切れが続いている。ドラッグストアでは滅菌ガーゼまで買い尽くされて、手術後のケアだったり怪我の治療など本来必要としている人たちに行き渡らない、そんな事態にまで至っているらしい。

「……ああ、うん。そう、じゃ対応はそれで行こう。いや、しかし参ったなあ……うち？

こちらの教室はまだ大丈夫。そうは言っても時間の問題かもしれないが――」

事務カウンターに入り、ノートパソコンを弄っていると教室長がいつになく厳しい顔で電話をかけている。あまり大っぴらにできないことだろうか――声を抑えながら話している。

指でこめかみを揉みながら受話器を置いた教室長に、

「……あの、何か問題でも起きたのでしょうか」

と、私は尋ねた。

「ああ、それが……緑が丘校の教室長から電話だったんだが」

緑が丘校というのは近郊に展開しているうちの塾の校舎のうち、大学受験に特化した教室だ。この教室の目と鼻の先にある。教室長は溜息を漏らしながら言葉を継ぐ。

「緑が丘校の生徒が住んでいる団地で、コロナウイルス感染者が出たらしい――保護者の判断で、その生徒は通塾を控えてくれるそうだが……」

えっ、と私は声を詰まらせた。団地の名を訊くと、私の家のすぐそばだ。こんな、身近な場所だ。

そう思うと、ひやりと冷たいものが背筋を滑り下りる。これまで、感染者の話はメディアを通して耳にするだけだったけれど――。

「今回は、保護者が弁えてくれたから助かった。でもこのまま感染が広まったらなあ……塾としてもどう対応したらいいか。連日、会議でもそのことばかりで」

教室長の言葉を聞きながら、私は膝の上でこぶしを握りしめた。

そうだ。コロナウイルスは刑事事件などとは違って、決して新聞の紙面やテレビのディ

スプレイの向こうに収まっている話じゃない。今や日本全体に広がって、何処で、誰が罹るかわからない。

緑が丘校に通っていた生徒が住んでいる団地で感染者が出た——もし、その生徒か、家族が感染者と接触があったら？ ——先週までに、そのまま生徒が塾に通っていたとしたら——今頃、緑が丘校でも感染が広まっているかもしれない。知らないうちに——緑が丘校の教室長とうちの教室長はよく顔を合わせているし、校舎が近いから緑が丘校とこの教室、両方を行き来して授業を受け持っている講師もいる。だったら、ここでも——ううん、何より——感染者が出た団地が近所ということは、感染者自身やその家族が私がいつも行くスーパーやコンビニを使っている可能性だってあるのだ……。

私はこくりと喉を鳴らし、ぬるい唾を飲みこんだ。悪い方向に考えると、いくらでも想像できるのがこのウイルス感染なのだ。目に見えない、長い潜伏期間がある、正体もよくわからない、特效薬もワクチンもない——。

「いよいよ迫ってきたな」

教室長が小さく声をこぼした。

「ねえ志村けん、死んじゃったって知ってる？」

「コロナでしょ。本当にショック……」

「志村どうぶつ園、どうなるんだろ。私、すごく好きだったのに」

廊下で仲のいい女子生徒たちが集まって、そんなふうには話していた。三人ともこのあいだ小学校を卒業したばかり、新中学一年生だ。ただし卒業といっても——今年行われた卒

業式は保護者や在校生の参加はなく、合唱もない、ごく簡素なものに終わった。四月のはじめには中学の入学式があるはずだが、それもどうなるかわからない。例年通りに行われるのか、それとも「三密」対策が徹底されるのか、式はなくなってしまふのか。その連絡が保護者宛てにメールで届く予定だが、学校側も刻一刻と変化する動向に方針を決めかねているらしく、なかなか送られてこない。

「そろそろ授業始めるぞ。席につけよー」

三人にそう声をかけたのは、白衣を着た大学生のアルバイト講師だった。マスクをつけていない。

……ああそうだ、彼も手持ちのマスクを切らして、ずっと塾のストックを使っていたんだったな。

それが切れたから、今日は仕方なくマスクなしで授業を行うのだろう。

「あおう、こんにちは。小牧ですが……」

そのとき、おずおずとかかった声に私は顔を跳ね上げた。仕事帰りだろうか、ショートカットの髪に細身のスーツを着た女性が校舎の中に入ってきた。小牧ゆいの母親だ。今日ゆいは塾に来ていないが、保護者面談が入っている。私は彼女を迎えるために席を立ち、入り口に回ると頭を下げた。

「足を運んでいただきありがとうございます。八時からの面談ですよね？ 少々こちらでお待ちいただけますか。今教室長を呼んで参ります……」

そう言って別室に案内しようとしたが、ゆいの母親の耳には届いていないようだった。

彼女は声を発している私のほうではなく、廊下に視線を注いでぼかんとしている。廊下の

ほう——教室の前で話している三人の女子生徒と、そのそばにいたアルバイト講師を見て。

数瞬おいて、ゆいの母親の眉根が歪んだ。ヒステリックな声がその場に響く。

「——どうしてマスクをしてない先生がいるんですか！ この時期に……非常識でしょう！ こんなところにゆいは通っていたんですか」

家に帰った途端、どっと疲れが押し寄せてきた。私は溜息とともにソファに深く体を沈めると、ストッキングを床に脱ぎ捨てた。その後、教室長が出てきてなんとかゆいの母親を落ち着かせた。教室長は職員、講師に必ずマスクをするよう指示した。マスクを用意できない者は仕事から外す——そうまで言いきって。手持ちのマスクがない講師はどうするのだろうか？ わからない。

私はくしゃくしゃと髪を掻きむしりながら、スマートフォンに手を伸ばした。市也のラインアイコンに指を滑らせ、通話ボタンを押しこむ。

「……あ、市也？ 夜遅くにごめん——あの、さ。今週末に会うことになっていたでしょ。そのことなんだけど……」

「あーうんうん。何、改まってどうした」

市也の明るい声が耳に触れる。家でビールでも飲んでいたところなのだろうか、いやに上機嫌だ。

「うん、私ちょっと考えたんだけど……会うの、予定を見合わせられないかな？」

「えっ、仕事でも入った？」

「ううん、そういうのじゃないんだけど……」

どう伝えたらいいのだろうか。私は疲労でうまく回らない唇を舌先で湿らせ、言葉を選ぶように話した。

「うちの近所で、コロナの感染者が出たの。私、怖くなっちゃって。そのひとの生活圏とかぶっていたってことでしょ。もし、私も知らないあいだに感染していて市也にうつしちゃったりしたら、って思うと……そういう可能性がゼロじゃないんだもの」

納得してくれるだろうか、と内心はらはらしていた。市也は大雑把な性格だから、今みたいに皆がマスクをしたり、換気や触れたものに気を払いながら、消毒を繰り返す生活なんて億劫以外の何ものでもないだろう。私だって市也には会いたい。だが、節度ある行動が大切なひとを守る――最近、そんな言葉を耳にする。だったら、できるだけリスクを冒したくない……。

「いやいや、そんなことあるわけないだろ……つたく、神経質だな。近所で感染者が出たって……それくらいのことなんで俺らが予定を変えなきゃいけないんだよ。……だいたい、最近濡と会っても居酒屋ひとつ入らせてくれないし」

そのくらいって、と私は絶句した。

「だって、この時期に居酒屋なんて……行けるわけじゃない。危険だよ。ねえ、お願い。今回だけは……念のため、ってだけだから。用心するに越したことはないでしょう？ 今流行っているのは治療薬もワクチンもない……まだ正体だって、よくわからないウイルスなんだから」

「ああ、もう嫌になるな。テレビをつけても、未知のウイルス未知のウイルスって――そんな言葉ばかり繰り返されていて。……コロナなんか、インフルエンザの少しひどいの

くらいだって。用心って何だよ、それ。馬鹿みてえ」

インフルエンザのひどいの。この期に及んで、市也の考えはその程度なのか。危機感や認識の違いに目眩を覚える。

そんな言い方しなくてもいいじゃない——私はあなたのことを心配しているのに。そんな言葉が口を突いて出そうになったが、なんとか堪える。

「お願い、市也」

——警戒する私が悪いのだろうか？ 市也の言う通り度が過ぎるのだろうか……。

だんだんそういう気分になってくる。ううん、過ぎるくらい警戒したほうが今はいいに決まってる……。

わかったよ。不承不承といった感じで、市也の口からそうこぼれるまでには時間がかかった。彼は吐き捨てるように言った。

「ほんと、馬鹿みたいだよ。みんな、すっかり振り回されてさ」

三月三十一日 国内PCR検査陽性者数累計二一六六名 死亡者数六十六名

仕事から帰るなり、玄関に置いたアルコール消毒液のポンプを押す。念入りに、手首の方まで液が行き渡るように擦りこむ。それから洗面所へ。ハッピーバースデーの歌を二回、口ずさみながらハンドソープをしっかりと泡立てて洗う。ハッピーバースデーの歌を目安に十分な洗浄時間を確保することを教えてくれたのはイギリスにいる明日香だ。何でも、首相自らそう国民に呼びかけているらしい。

……昔も、こんなふうにはばかり懸命に洗っていたことがあったっけ。

手をぬるま湯ですすいでいると、ざらついた記憶が蘇る。中学三年生のころ、手を何度も洗い続けてしまつて止められないことがあつた。どんなにしつこく石鹸を泡立て、水を流そうと自分の手が汚れたままだという気がしてならなかつた。その年の秋から冬にかけて、私は手洗いを頻繁に繰り返した。ほかのことをしていても、手を洗いたいという衝動が不意に襲つてきて居ても立つてもいられなかつた。

「ハッピーバースデーか……」

ハッピーバースデー、トゥー、ユー。そんな歌詞と一緒に、自分の誕生日を家族に祝われたことはあつただろうか。本当に幼いころ、小学校に上がる前ならあつたかもしれない。でも、よく覚えていない。少なくとも両親に祝われ、期待で胸をいっぱいにしながらかケキの蝋燭を吹き消したようなことはなかつた。父も母も厳しいひとだったから、私はいつもどこか緊張していた。——今となつては、遠い昔のできごとだけれども。実家から遠く離れた大学に行き、進学と同時に一人暮らしをはじめた。卒業してからはそれこそ連絡もろくに取りあつてない。

夕食を済ませてから、私はスマートフォンに手を伸ばした。明日香にラインメッセージを打ちこむ。イギリスは首相が外出禁止措置を発動した。生活必需品を買う以外は、外には出られない。違反者には罰金が科せられるという。

「明日香、元気？ 体調は変わりないかな。外出禁止になつたって聞いたけど、大丈夫？ 色々不便はあると思うけど、体に気をつけて過ごして」

少しして、明日香から返事がくる。

「このあいだは急に電話を切つてごめんね。私たちは——とりあえず私とジョン、リビー

は今のところ元気。外出禁止も、少し慣れたかな。リビングも最近はずらずおとなしく家で遊んでくれています笑”

そんな言葉が目に入ってきて、私はほっと息を吐いた。

”外に出られなくて気が塞ぐようだったら、話くらいは聞けるから。ラインでも電話でも、気軽にして”

”ありがとう”

”近所の人とは……あれからどう？ アジア人だからって嫌な目に遭ってない？”

訊くかどうかかなり迷ったが、私はそう書き送る。それは、気にかかっていることのひとつだった。

それまでテンポよく続いていたメッセージのラリーが、ふいに途切れた。数分――すぐにレスを返す明日香にしては少しばかり長い沈黙の後、大丈夫だよ、と短い言葉がディスプレイに灯った。

それから、私たちは気を紛らわせるように他愛ない話を二、三かわした。明日香から送られてくるのは、外出できないもののリビングが家の中で起こすちよつとした面白い仕草や反応が多かった。いつものように明日香が私の就寝時間を気遣い、会話を切り上げようとしたとき、

”……世界は随分変わっちゃったね。イギリスも、首相までコロナウイルスに感染したのがわかって、大変な騒ぎよ。快復してくれるといいんだけど……”

そんな明日香の言葉がトーク画面に連なった。

四月七日 国内PCR検査陽性者数累計四三九三名 死亡者数九十八名

その日は――いや、総理がこの先の方針を発信した前日からとにかく落ち着きのない二日間だった。七都府県に緊急事態宣言が発出された。教室長は本部会議に駆り出されている。長引いているところを見ると、これからどうするかなかなか結論に達しないのだろう。塾には保護者から問い合わせの電話がひっきりなしにかかってくるので、私はその対応に追われた。

これから塾の授業はどうなるのか。続けるのか。続けるとしたら、感染予防の対策は万全なのか。休塾なら、今月分の月謝は返金してもらえるのか。学校も休みなのに、塾まで閉まってしまったら子供たちの勉強はどうしたらいいのか。

私は毎回鸚鵡のように同じ答えを口にする。今対応を検討しています。後ほど、保護者様宛てに今後の授業の予定をメールと文書で送らせていただきます。

「授業、行うわけにいかないでしょう。そのうち休業要請も出ると思うけど、きっと学習塾もその中に入っている。他塾も休むことになっている。だったら足並みを揃えるしか……」

会議から帰ってきた教室長は、疲れた顔でそう言った。会議で決まった方針は明日からゴールデンウィークまで、約一ヶ月のあいだ全面休塾だ。

「穂川さんも今日は大変だったでしょう。明日からしばらく教室は閉めるから、穂川さんもお休みで大丈夫ですよ」

「……あ、でも保護者対応は？ 文書も郵送しなくてはならないし、しばらくは事務作業が大変なのは」

「それ、僕がやるから。どうせ授業もないしね。お疲れ」

休塾のあいだ、まったく仕事がないのか。一ヶ月も？ そのあいだ給料は、と頭の中では色んな言葉が飛び交ったが、「お疲れ」と話を切り上げノートパソコンのキーボードを叩きだした教室長にそれを尋ねることはできなかった。

四月十四日 国内PCR検査陽性者数累計八一〇八名 死亡者数一六二名

けほん、と誰かの咳払いが聞こえた。私ははっと顔を跳ね上げてあたりを見渡した。最近は、見知らぬ人の咳やくしゃみがやけに大きく耳に響く。咳をしたひとは、精肉コーナーで品出しをしていたスーパーの店員だった。

大丈夫、と私は自分に言い聞かせる。大丈夫、二メートル以上は離れているし。相手も私もマスクをしているし。だいたいこの時期だ……花粉症かもしれない。大丈夫。大丈夫。そう胸の中で繰り返しながら早足で通路を歩き、商品を買った物カゴに放りこんでいく。長居してはいけない。それだけ、感染リスクが上がるのだから。

緊急事態宣言が発出されてから一週間が経った。街の様子も随分変わった。特に外食産業はほとんどの店が休業せざるをえなくなり、ファミリーレストランやチェーン系のカフェが連なる国道沿いは、日が沈めば真っ暗になった。図書館やショッピングモールも閉まっている。外で子供たちがはしゃいだり、人々が楽しげに話しているところを目にするこゝとがなくなった。皆マスクで嚴重に口許を覆って、用事だけを素早く済ましていく。大きな声をあげることもなく、どこか空気を吸うことさえ躊躇するように小さくうつむき、ひとりひとりが薄い硝子の殻に包まれているみたいに、世界は冷たい静謐の中に漂う。

できる限り外出はしたくない。四日分の食料が詰まったエコバッグの持ち手がずしりと肩に食いこむ。ざらざらしたキッチンペーパーが鼻頭に擦れ、くしゃみが出そうになる。布マスクだけではウイルスの侵入を防ぐのは難しいから、フィルターとしてキッチンペーパーを内側に挟んでいる。マスクフィルターも不織布も品切れだ。代わりにキッチンペーパーを使うと良いという、見知らぬひとのツイートをタイムラインで見つけた。私はくしゃみを堪える。このあいだ、喉が乾燥して小さな咳払いをしたら通りがかりの人に睨まれた。

市也とは尚更会うわけにいかなくなった。自分の迂闊な行動のせいで市也に感染が及ぶかもしれないと思うととても会う気になれなかったし、世の中がこんな状態なのに暢気にデートをするというのも気が引ける。

スーパーを出て、道を歩いているとき思わず息を呑んだ。そこは小さな居酒屋だった。店主が一人で切り盛りしていて、地元の人から愛されているような店だ。まだ営業時間ではないから入り口はシャッターが下ろされているのだが、張り紙がされている。コピー用紙に、マジックで書いた几帳面そうな文字が連なっている。

——四月七日に緊急事態宣言が発出されました。飲食店には自粛要請が出ています。この店が今も営業しているのは違反です。みんな迷惑しています。今すぐ店を閉めてください。

誰かがわざわざ貼りにきたのか。こんなことをする人もいるのか、と思わず眉を顰めたが、張り紙をした人間の気持ちがまったく理解できないというわけではなかった。むしろ、

このひとの胸のうちも自分とさして変わりがないような気がした。誰かの咳に怯え、そのひとを凝視してしまうのも、営業を続けている店に張り紙をするのもきつと同じだ。私たちは同じものを抱えて、その重みに戸惑っている。

ひりつくような不安――

張り紙に書かれたみんな、とはいったい誰のことだろう。

張り紙をした人は、きっと自分が書き綴った文言に説得力をもたせようとして安易にみんなという言葉を使ったに違いない。でもその言葉に、自分の胸のうちまで見透かされているような気がした。私たちは皆、似たり寄ったりなのだ。

四月十六日 国内PCR検査陽性者数累計九三二名 死亡者数一九一名

休塾になってしばらくが経つ。社員の一人と連絡を取りあうことがあったので、そのとき自粛期間の休業手当について訊いてみた。手当が支給されるかは今のところわからない、社長次第だ――そんな答えが返ってきた。政府では給付金も検討されているが、議論は二転三転してこれもどうなるか一向に見通しが見つからない。

「ああ、うん本当に参ってる。緊急事態宣言が出てから、その対応でこっちはてんでこ舞いだよ……テレワーク？ いやいやうちの部署じゃ無理だって」

電話で市也に仕事の様子を探ねると、そんな返事がかえってきた。

聞き慣れた市也の声がこぼれてくると、自分でも驚くくらい安堵を覚えた。家に籠もっていてもこのところ常に気が張りつめていたが、それが不意に緩んで私はほうつと長い溜息を吐いた。

市也は乳業メーカーの営業職だ。緊急事態宣言の影響も大きく、仕事のほうはかなり大変そうだった。

「大丈夫？ あんまり無理はしないでね……」

「平気平気——まあ、程々にやってるよ。滯のほうは？ 仕事、業種的に結構煽りを受けてるんじゃないの？ ああ、でも滯の会社はテレワーク移行もスムーズにできそうだな……」

「…」

そんな市也の言葉に、私は小さく息を呑んだ。

「……ああ、うんそう。テレワーク、になりそう」

とっさに吐いた嘘に、唇を噛む。私が去年会社を辞めて、今はパートで学習塾で働いていることを市也は知らない。市也は、まだ私が以前の会社に正社員として勤めていると思っている。彼には言っていない。今日こそちゃんと言おう——そう思っても、彼の顔を見ていると口を噤んでしまう。言えなかった。

市也とは大学で知り合った。三回生時のゼミが同じだった。フットサルサークルに所属し、口が巧くいつも快活な市也はクラスの中心だった。飲み会をやれば決まって幹事を任せられ、そのときの集まりに相応しい感じのいい店を見つけてくる。盛り上げ役もそつなくこなす。それに比べ、私は目立たない学生だった。サークルも絵本制作が主な活動で、仲のいい女友達とちまちまと豆本を作っていた。もともと人付き合いが苦手なのに、大学ではそういうのを引き摺りたくない、少しは変わらなくちゃ——その一心で無理に明るく振る舞っていた。

市也がなぜそんな自分とつきあい続けるのか——私にも、わからない。

滯はいいやつだから。底抜けに人が好くて……甘えさせてくれるから。市也はそう言う。でも、その二人の差に私はいつだって負い目めいたものを感じていた。

卒業してからはそれは更にひどくなった。市也は大手の乳業メーカーに就職したが、私なんか内定をもらえたのは、威圧的な上司と長い拘束時間のせいでなかなか社員が定着しない零細企業だった。そこで働いているあいだは、毎日が鉛のように重かった。疲れがなかなか取れず、溜まるばかり——眠たくて仕方ないのに、いざ横になっても睡眠はひどく浅くすぐに目が醒めてしまう。上司の怒鳴り声ばかり耳にしているからか、彼女が席を外していても、会社にいると時折空耳が聞こえてびくりと体を震わせてしまう。

会社が辛い、と市也に相談しても、

——滯は昔から、甘いところがあるよな。社会に出たらしんどかったり、仕方がないこともたくさんあるだろ。もうちょっと遅しくならなくちゃ。

そう言って、相手にしてくれなかった。結局、その後しばらくして体調を崩してしまった。通勤途中で過呼吸になり、そのうち朝に起き上がれなくなった。

もし会社を辞めたなんて言ったら……それこそ、なんて市也に言われるだろう。そう思うと、どうしても勇気が出せず口を噤んでしまう。

「そうなんだ。いいなあテレワーク。羨ましいよ」

そう笑う市也に、私は小さくうつむいた。

「あのさ、話は変わるけど……」

堪らず、私はそう口にしていた。切り出そうとしている話も決して愉快なものではなか

ったけれど、自分の仕事のことはこれ以上喋りたくない。

「私たちが会うのも……緊急事態宣言が出て、こんな大変な状況でしょ。もう少し様子を見ない……？」

また機嫌を損ねてしまうだろうか——そう思いつつ、おそろおそろ言葉をつむぐ。市也と言いつ争うのは何より嫌だし、家でひとりでいるのも寂しい。でもこれは大事なことから。そう胸に言い聞かせて、スピーカーに耳を澄ます。

だが、

「……そうだな、わかった。俺はそれでいいよ」

こっちが肩透かしを食らうくらい、市也はあっさりと言った。

「ほんと？ いいの」

「うん、まあ——俺も最近仕事が詰まってるし」

「あ……ありがと」

「じゃあ、しばらくは会うのは控えるって方向で」

四月二十日 国内PCR検査陽性者数累計一〇九三名 死亡者数二六三名

手を洗う。この行為にこれほど神経を使うようになるなんて、数ヶ月前誰が想像し得ただろう。ハッピーバースデーを二回、口ずさむ。爪のあいだまでハンドソープの泡が行き渡るように五指を擦り合わせる。音をたてて温水が勢いよく排水口に吸いこまれていき、私は水を切った掌をまじまじと見つめた。

これで、本当にきれいになったのだろうか。もしウイルスが付着していたとして、これ

で完璧に洗い流されたのだろうか。そんなの誰にもわからない。しっかりと確かめられるわけじゃない。

私たちができるのは、すべて感染の確率を下げることだけだ。これだけ苦労して、息を詰めて自粛していても決してゼロにはならない。

外出するのは、本当に最小限になった。食料品が切れたときだけ。外に出るときは触れるもの、行動、布マスクの効果の薄さ——とにかく色んなことに注意しなければならない。外に出るのが怖い。感染しないだろうかとひやひやしながら街を歩くのは、ひどく気疲れする。テレビから流れるニュースは、どの局も連日コロナウイルスのことばかりだ。感染者数に死亡者数、どちらも増え続けている。路上で亡くなっている人がいてどうも死因はコロナらしいとか、風邪らしい症状が出てからわずか一夜で肺炎にまで至ったとか、そんな話も耳に入ってくる。

夜になって、私は明日香に電話をかけた。トーク画面に連なる文字ではなくて、人の喉から発せられる柔らかな声にひたすら耳を澄ませたかった。

「……もしもし、明日香？ うん、うんそう。元気なのね……良かった。うん、こっちは緊急事態宣言が出たの。イギリスの外出禁止よりは随分緩いけど……うん、とうとう踏み切ったかたちね」

「そう……滞、仕事はどうなってるの」
明日香はそう尋ねる。

「仕事も当分休み」

「そっか。……こっちは外出禁止になってしばらく経つけど、街の様子は本当に変わった。

ねえ聞いてよ、ヴィクトリア駅も人がいなくてがらがらのよ」

ヴィクトリア駅の様子は、私もニュースで目にしていて。ひっそりとした歌舞伎町や、ちらほらとしか歩行者がいない渋谷の交差点の映像を見たときよりもショックを受けた。真昼なのに、閑散としたヴィクトリア駅。

私がイギリスに行ったときは——ヴィクトリア駅は多くの人でごったがえしていた。ロンドンを代表するターミナル駅だから、各地から電車が乗り入れ、ずらりと並んだ電光掲示板の行き先を見ているだけでもわくわくした。朝には切符売り場にたくさんの人が並び、慣れないやりとりで私が決済にもたついていると販売員に「too late!」と怒られた。いつも人々の喧噪に包まれ、それを背中で聞きながら売店で熱々のシェパードパイを買った。構内のカフェで紅茶とスコーンを頼むと、隣の席にいた老夫婦が「旅行なの？ それ、とってもイギリス式の食べ方よ」と和やかに話しかけてきた。

それが今、客は一人も見当たらない。人気のない構内は、私が目にしたヴィクトリア駅とはまるで別の場所のようだった。

「そっか……」

私は思わず溜息を吐いた。いつもなら——通話の途中でイギリスのランドマークが口について出てきたら、そのまま明日香たちと回った場所の話になる。ウィンザー城の刀剣や鎧のコレクションは凄かったね、とかセントポール大聖堂の庭にいた栗鼠がかわいかったね、とか。でも今は、そんな話とはとてもできない。きっとどこもすっかり変わってしまった。自由気ままにロンドンをめぐり、明日香たちと大きく口を開けて笑いあった日々がどうしようもなく遠くに感じる。

明日香も私も思わず口を閉ざしてしまい、沈黙が二人のあいだに降り落ちた。

「ねえ話は変わるけど……明日香は覚えている？ 昔さ——」

だから、私は日本のことを明日香に語るようにした。今の日本の話では、コロナウイルスのことばかりできっと嫌になる。口にのぼらせたのは、明日香が子供のころのことだ。

明日香は十五歳まで日本で暮らしていた。私の家の近所に住んでいて、幼いころは日が暮れるまで二人でよく遊んだ。昔、明日香が目にしてた日本。それなら、今の変わり果てた姿は——少なくとも彼女は知らない。

四月二十四日 国内PCR検査陽性者数累計一二七〇七名 死者数三四五名

夜、ゴミを捨てたついでにあたりには視線をめぐらせた。近所には八階建ての大きなマンションがあり、窓からオレンジ色の灯りを無数にこぼしている。アパートの駐車場の隣には建て売りの家が数軒並び、その先には古い神社があつて、こんもりと繁った鎮守の森が暗紫色の紗幕を引いたような曇り空を背負っている。

静かだ。とても。皆家に籠もっているのだろうが、物音や話し声がこぼれてくることもない。ひよっとしたら家に灯りは点いていても、玄関を開けると誰ひとり存在せず、空の部屋ばかりなのじゃないか。それか——緊急事態宣言が出てから、私の体が目に見えない真綿にくるまれて人の声にも些細な物音にもとことん鈍くなってしまったのではないか。そんなふうに思いたくなる。

こんな中でコロナウイルスに罹ったら、堪ったものじゃないな。

私はそう思い、小さくせせら笑う。

今日、ニュースサイトを検索していると「大手進学塾、谷山ゼミナル自己破産」という見出しが目に入ってきて、鼓動が跳ね上がった。

その名前は私もよく知っていた。このあたりでも、主要な駅の近くには必ず谷山ゼミが大きな教室を構えている。うちの塾よりも業績が良さそうだったのに――倒産の直接の原因は、コロナ禍による営業自粛。近年は生徒数が伸び悩んでいて、債務も重く経営悪化が続いていたらしい。

うちの塾は、生き残れるだろうか……？

そう思うと、心臓が掴まれたような気分になる。休塾で、少なからず損失は出ているはずだ。

塾が倒産したら。そうしたら、自分は……？ 次の仕事を探すにしろ、ちゃんと見つかるのだろうか……。

ほんの数ヶ月前まで――どうして生きていることが、さも当然のように感じられたのだろう。

四月二十八日 国内PCR検査陽性者数累計一三七〇一名 死亡者数四一三名

家に籠もっていると気が塞ぐ。洗濯物の乾きが悪かったり、卵が切れていたり――そういった些細なことが、いつもよりずっと苛立たしく感じる。ついさっきまでつまらないことに腹を立てていたかと思えば、ふと感染や塾のことが頭によぎった途端不安に駆られ、落ち込んでしまう。不安になると、つい左手の親指の甘皮を触ってしまう。爪まわりの柔らかい皮膚を撫でていると、ほんの少しだけ安心する。最初は撫でるだけのものが我慢で

きなくなり、掻きむしるようになったのはいつからだろう。それは日に日にひどくなり、掻きむしるのと、血のこびりついた親指にハンドクリームを擦りこむのがすっかり日課になってしまった。

居ても立ってもいられないような気持ちになると、市也に電話をかけた。とにかく、人の声が聴きたい。こんなあやふやで、不安な世界を生きているのは自分一人ではないということ確かめたかった。でも……こんな自分は市也には知られたくない。もう昔とは違う。それまでの自分を引き摺りたくない、変わりたい――大学進学と同時にそう心に決めて、出会ったのが市也だったから。だから、市也に電話をするときも、できるだけ笑って深刻な話題は避けた。

自然と、口にのぼるのは他愛ないできごとばかりになる。電話を切った後、部屋ごと静寂にくるまれるのが嫌で私は話をできるだけ引き延ばそうとした。最初のうちは市也もそれに付きあってくれたが、だんだん億劫がるようになった。

ねえ、会いたいよ。私から会うのは控えようと言ったけどさ……うん、ごめん。寂しくて。そう……ちよつと限界なんだ。短い時間でいいから、市也の顔を見たい。そう言うとき、市也は低く唸った。いや、それは俺もだけど。仕事がさ、本当に忙しくなっちゃって。今はちよつと難しいかも。落ち着いたら、ちゃんと連絡するから。そう言われたら、仕様がな。そっか。市也……仕事、大変なんだ。うん、うん……そうだね。この騒ぎが落ち着いて、早く楽になったらいいのに。無理はしないでね。頑張って……。

別の日には、電話に出るなり市也はすげなく言った。ごめん濤、今日は手短に頼む。今、ちよつと手が離せなくて。うんそう、残業残業。

そうして、ゴールデンウィークが近づいてきた。連休といっても、今年は随分勝手が違う。どこかに出掛ける予定はもろろん入ってないし、自粛中だから私の生活は変わらない。緊急事態宣言が解除されるまで、息を潜めるみたいに過ごすのだ。

月末、どうしても校舎に出向いてやらなくてはいけない事務作業があり、私は久しぶりに出勤した。

家を出たときだった。玄関から足を踏み出し、頬に外気が触れただけで息が詰まりそうになった。鉛色の曇り空が、まるで私を押しつぶそうと迫ってきているように見える。

外が――怖くて堪らない。コロナウイルスに感染するかもしれない、その懸念があるからだけではない。道を吹き抜ける風が、それに軋む木々の梢が、脇を通り過ぎた自動車の排気やエンジン音までが、とてつもなく大きな存在に感じる。少し気を抜けば、自分なんて瞬く間に圧搾されてしまいそうだ。目を、耳を塞ぎたくなるのを堪えて私は指の甘皮を掻きむしる。

いくら抑えようとしても、不安は忍び寄ってくる。いつだって首回りに、その柔らかい腕が巻きついてもう一生それから解放されないような気持ちになる。なんとか出勤したものの、仕事場に辿りつくまでに疲れ果ててしまった。

「穂川さん、これ郵便局まで持って行ってくれないかな。生徒に配布する休塾期間中の追加課題。今もまだ印刷している最中だけど、とりあえず出来た分だけでも急いだほうがいいから」

今日やるつもりだった仕事があらかた済んだころ、社員のひとりからそう言われ、大量

の封筒を預かった。

また外に出なくてはいけない——私は思わず息を呑んだが、まさか嫌だと言うわけにはいかない。時計に目をやると、本局まで足を伸ばさないといけない時間だった。

——大丈夫、何も不安に思う必要はない。慣れた場所ばかりなんだから。

本局は市也のマンションの近くだ。ほらよく通る道でしょ、私はそう自分の胸に言い聞かせた。

いつのまにか雨が降ったらしい。濡れたアスファルトが、車のヘッドライトに照らされてぎらつき、凶暴な光の跡を私の目裏に残していく。ぼつり、とたまに肩に滴が当たるが傘をさすほどではなかった。本局の時間外窓口に追加課題を出し、塾に戻ろうと私は足早に進む。少しすると、四つ辻の交差点に行き当たった。

市也のマンションはもう目と鼻の先だ。どうしているのかな。今の時間じゃまだ残業をやっているだろうか。会いたい。市也の元気な顔を見たら、少しはなんとかなるような気がした。ささやかでも何かがうまく循環しだすんじゃないか、という淡い期待を禁じることができない。以前と同じように。

信号待ちをしているとき、そばのコンビニの看板が目に入った。市也の家に行くとき、ときどき立ち寄るコンビニだ。ふと私は仕事場で使う修正テープが切れていたことを思い出した。そうだ、買っておかなかちゃ。そう思い、足向ける。

本日、マスクの入荷はございません——そんな張り紙がされた衛生用品の陳列棚を横目で見つっ、文房具を探す。ちょうどいつも使っているものと同じテープがあったので、それを手に取ったときだった。

「ねえ家にフレッシュってある？ なかったら買っていこうよ」

レジのほうから、そんな女の声が聞こえてきた。マスクをしているが、彼女のはっきりした目鼻立ちと、品のいいメイクがそこに施されているのはわかった。クリーム色のシフオン生地が軽やかに揺れるブラウスを着て、チョコレートブラウンの髪を巻いている。

「あつたあつた。真希^{まき}、買わなくて大丈夫だから。早くうちに帰ろう」

女の隣に立ち、そう笑ったのは——その姿はよく知っていた。仕事帰りなのか、スーツを着た市也は機嫌よく声をあげて、女を急かす。

「もう待ってよ……」

そう言いながら、二人は店を出ていく。私は思わず身を竦ませた。マガジンラックの影に隠れていたせいとか、市也は私に気づいていないみたいだった。

市也は、さすがに緊急事態宣言が出た後では人の目があるからだろうか、マスクをしていた。だが息苦しいのか、鼻頭はむき出しになっている。今にも外したいと言わんばかりにむず痒そうに耳に掛けた紐を弄っていた。

それを見て、女が小さく吹き出した。

「マスク、そんなに嫌ならもう外しちゃえばいいのに」

「うん、まー……俺も一応ね？ 知らない人にマスクをしろ、っていきなり注意されるとか嫌だし。そういうこともあるって、ネットに書かれていたからさー」

「いいじゃん。家だって近くでしょ。もうそんなに擦れ違うひともいないよ」

女の目が柔らかく細まる。その言葉を耳にして、市也はしみじみとつぶやいた。

「……真希っていいよな。コロナコロナってうるさくないし、卑屈にもならないし」

「なあに、それ」

鼻にかかったような甘ったるい声を出しながら、女はくすくすと笑う。二人は市也が住むマンションがあるほうへまっすぐ歩いていった。交差点を渡るとき、女が市也の腕に自分の手を親しげに絡めた。

四月二十九日 国内PCR検査陽性者数累計一三九二三名 死亡者数四三五名

どうして？

何度も、何度もその問いだけが胸に浮かぶ。

どうして？ あの女のひとは……。

誰？

市也、どうして？

どうして——そんな自分の思いから逃げたくて、日が暮れるころ、私はようやく布団の中から這い出しスマートフォンに手を伸ばした。

声が聴きたい。柔らかい声。私を怒鳴ったり、脅したり、傷つけたりしない声を。

「もしもし……明日香？ 少しだけ——今少しだけ話しても、いいかな……」

喉からこぼれる掠れた声は、なんだか自分のものではないみたいだった。

ねえ明日香、聞いてよ。昨日、こんなことがあったの。ひどいよ。どうしてこうなっちゃったんだろう。学生のころから、ずっとつきあってきたのに。私の何がいけなかったのだろう——私、もうどうしたらいいのかわからなくなっちゃって……。

本当はそう訴えたかった。少しでも漏らせば、ほつれた縫い目から次々と糸が這い伸び

てくるみたいに、言葉があふれてきそうだった。それを堪えるように、私はときどき唇を噛み、その代わり以前と同じように日本の話をした。幼い私と明日香、二人揃って過ごした日本には、コロナウイルスも市也の影も存在しない――。

「明日香？」

話の途中で、私はその声をあげた。今日の明日香は言葉少なだった。いつもだったら相槌もよく返ってくるのに、ほとんどなかった。音声がうまく向こうに届いてないのだろうか。ふとそんな思いがよぎったとき、

「……濡は、気楽でいいよね。こんなときでもさ」

くぐもった、絞り出すような明日香の声が耳に触れた。

「……明日香？」

ひどく沈んだ様子に、私は思わず目を瞬かせた。

「昔の……日本のことばかり話してさ。もう、あのころには戻れないのに」

嗚咽を飲みこむように、明日香が喉を鳴らした。

「もうやめてよ。日本のことなんて聞きたくないよ。こんなに……っ、私はこっちに馴染もうとしているのに！ 昔からずっと！ ――なのに少しも叶わないっ」

明日香の荒い息がマイクにぶつかって、ざらついたノイズを吐き出す。普段穏やかな彼女が叫ぶのを聞きながら、私の口からはごめん――と、ひどく弱々しい声しか転がり落ちなかった。

「……ジョンが……コロナに罹ったのよ。私、どうしたらいいか……自宅療養を勧められただけど、咳が続いているし……これ以上悪化しないか、気が気じゃなくて。だから、ごめ

ん。しばらくのあいだ、電話も控えてほしいの。とてもそういう気になれない……」

「ジョンが……だいじょう……」

大丈夫なの。とっさにその言葉が口を突いて出たが、

「そんなの、誰にもわからないよ」

明日香はびしゃりと言い、電話を切った。

四月三十日 国内PCR検査陽性者数累計一四一二二名 死亡者数四五七名

外から帰ったら、息を詰めるようにして慌てて洗面所に向かう。ふと、喉が痛むことに気づいた。まるで小さな棘でも引っ掛かっているような。唾を飲みこんだら、ましになった。

私は思いきりカランをひねり、手を洗う。

「……ハッピーバースデー・トゥー・ユー……ハッピーバースデー……」

ハッピーバースデーの歌をゆっくりと二回——口ずさみながら。それだけの時間をかければ、仮にコロナウイルスが皮膚に付着していても洗い流せるという。

——本当に？

そんなの、誰にもわからないのに。

たとえば今私の手にコロナウイルスがついていたとしてそれがちゃんと洗い落とせたか
どうかなんて——誰が確かめられるの？ どうやって判断できるっていうの。相手は特効
薬もワクチンも開発されていない、未知のウイルスなの？

気がつけば、ハッピーバースデーの歌を口ずさみ終えても私はしつこく手を洗い続けて

いた。まず手の甲を擦り、次に掌。五指を一本ずつ泡でくるみ、揉みこんでいく。爪の間に潜りこんだ細菌や汚れも落ちるように、掌に爪を立て搔く。最後に両手を擦り合わせる。それを何度も繰り返した。がしゃがしゃ、とハンドソープのポンプがいちいち鳴るのがうるさい。もう随分長いこと洗面所に籠もってしまったている。

ウイルスは消えたか、わからない。不安はどんなに手を動かしても、消えてくれない。

このところ、手を洗いはじめたら決まってこうなる。止めることができなくて、いつまでもやってしまう。肌からは油分がすっかり落ち、角質が逆立ってがさがさだ。

それでも洗う。洗わねばならない、と理由なく思ってしまう。

——ああまただ、と私は呻く。

目眩がしそうだ。これではまた昔に逆戻りだ。

たいして汚れてもない手を、何度も洗わなければ気が済まなかった中学生のころ。あのときは——そう、クラスにうまく馴染めなくて孤立していた。それと父から高校は私立の進学校に行くようきつく言いつけられていて、定期考査のたびに結果の善し悪しにひどく怯えていた。

父は昔から厳しいひとだった。しょっちゅう大きな声を張りあげて私を叱った。怒鳴る父が怖くて私が泣きだすと、今度は決まって「泣きやまないと、外に締め出すぞ」と叫んだ。

私は唇を噛み、必死で嗚咽を飲みこんだ。嗚咽と一緒に、恐怖や父を失望させた悲しみや、どうしたって収まりのつきそうにない自分の感情を飲みこんだ。

家の外に締め出されることを、子供のころの私は何より恐れた。一度外に放り出された

ら、もう戻ってこれないのだと勝手に思い込んでいた。自分を受け容れてくれる場所を永遠に失い、日が暮れてもあてどなく外を彷徨わないといけないものだと思っていた。

こんなときに、父のことなんて思い出したくない。

そう思い、私はきつく目をつむった。すると父の記憶の代わりに目裏に蘇ったのは、市也とその腕に手を絡め甘える女の姿だった。

どうして？

……私、いい子にしていたのに。

ちよつとした我が儘を言いたいときも、我慢していた。嫌なことでも、市也が望んでいたらいいよ、って笑ってこたえてきたのに。

市也も。明日香も。

何がいけなかったのだろう。

五月七日 国内PCR検査陽性者数累計一五二九〇名 死亡者数五九〇名

私はスマートフォンディスプレイをきつく引き寄せ、耳に当てた。少しでも気を抜いたら、掌から電話が滑り落ちてしまいそうになる。

もうどのくらいのあいだ、こうしてスピーカーからこぼれるコール音を聞いているのだろう。昨日からずっとこんな調子だった。

もういい……いつ繋がるかわからないものを待ち続けるのも疲れた。そう思いかけては何の前触れもなくせり上がってきた激しい咳に、だめだ、とにかく保健所に繋がらないことには何もできない、してもらえない——と唇を噛む。数日前から喉の痛みと熱が出て、

どちらもおさまる気配がない。ひどくなっていく一方だ。

体がどうしようもなく熱い。胸も火球を宿したみたいに熱い。朦朧とする中、吐き出される咳がだんだん自分のものではないような、ひどく遠いものに感じられる。無機質なコール音だけが、尽きない水音のようにただただ穏やかにこぼれ落ちた。

(了)